

# 日本の指導者 自国の歴史か 外交感覚を学ぶ

## 現代より はるかに国際的だった明治

横山 今日はお忙しいところ、ありがとうございます。また日頃は日本安全保障・危険管理学会の会長としていろいろご指導いただきまして、ありがとうございます。私もメンバーの一人としていつもたいへん良い勉強になっています。

日本の安全保障にいろいろと問題がありますが、先般の中国問題を含めまして、先生のお考えをお伺いしたいと思います。

渡辺 この六十数年、安全保障感覚がすっかり鈍磨してしまった感じです。四方が平和で、外国によって日本の安全が侵されるなどという危機意識はあるでなくなってしまったのでしょうか。「平和ボケ」といいましょうか、近現代史を振り返ってみても、こんな安穏な時代はありませんでした。これが2世代も続いたために安全保障感覚の鈍磨が起こっているのではないかと思います。

横山 おっしゃる通りです。

渡辺 例えば幕末から開国、維新を経て日清戦争、日露戦争に勝利する頃までの国民意識、特に指導者の安全保障感覚をもう一度学びなおさなければいけないのではないかと、常々思っておりました。



拓殖大学 学長・大学院長 渡辺利夫さん

**PROFILE : わたなべ・としお**

1939年山梨県生まれ、経済学博士（専門は開発経済学、アジア経済論）。慶應義塾大学経済学部卒業、大学院を経て経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授。2000年4月、東工大を退官し名誉教授、拓殖大学教授・国際開発学部（現・国際学部）長。2005年4月より学長。日本安全保障・危機管理学会会長。

最近の私の論文の多くが、先代の知恵に学べというスタイルになっているのは、それが故です。

かつての恩師にあたる江藤淳さんは、山本権兵衛が主人公の『海は甦える』という長大な小説を書いています。

横山 文学評論家で慶應大学文学博士の江藤淳先生ですね。

渡辺 はい。その中で「明治ほど国際的な時代はなかった」という表現を使っています。

逆説的に「現代は非常に非国際的な時代である」と

言っているわけですね。これほどグローバリゼーションが進み、モノも力もヒトも、技術も情報も、国境がないかのような時代が現代だと言われます。しかし、国民心理はじつに内向きになっています。

**横山** 明治時代は現代より国際的でしたか。

**渡辺** 明治のあの時期の指導者、例えば福沢諭吉、陸奥宗光、桂太郎、小村寿太郎らのことを多少なりとも勉強すればすぐにわかります。徹底的に冷嘲に国際関係を分析し、その認識に立ってどう戦うべきかという危機意識を彼らは常に保っています。まことに国際的な時代です。国際認識にピンポイントでも狂いがあればやられてしまう、という危機意識の故なのでしょうね。

**横山** 具体的な歴史としては。

**渡辺** 例えば日清戦争。当時の韓国は清国との君臣の関係にあって、内乱や政争があればすぐに清国から大量の派兵を要求していました。韓国は鴨緑江を隔ててすぐ隣ですから、何かあれば韓国は清国の属領になりかねない、そうなれば日本も危ないという意識が、日本の指導者には征韓論以来ずっとありました。

清国に服属していた韓国は、今度はロシアに傾きます。大国ロシアとの戦争を持続する力は日本には到底ありません。シベリア鉄道がウラジオストックまで着いてしまうことになれば、兵站がモスクワからやってきて勝てるはずはありません。そこで先制攻撃すれば勝てるかもしれませんとを考えました。

**横山** 短期決戦ですね。

**渡辺** そう、短期決戦です。勝つと思って始めた戦争ではなく、初戦に勝ってできるだけ早く講和条約に持ち込もうという戦争でした。

国際環境、周辺事態に対する認識が少しでも狂ったら国が滅亡してしまうという意識、そういう感覚が指導者に備わっていました。「明治が最も国際的な時代である」という言葉は、はっとするほどに鮮やかに明治の真実を伝えています。

それと比べて、現代はまことに非国際的。

## 核の議論さえ封じ始めた 「非核四原則」

**横山** 戦後、国益のための国家観というものは、もうなくなったのでしょうか。

**渡辺** サンフランシスコ講和会議に臨み、それからアメリカを後ろ盾にした日米安全保障条約、つまり日米同盟を結びました。

この日米同盟においては、日本が急迫の事態に陥ったときには米軍が日本を防衛する義務を負います。しかし、日本は米軍に基地を貸与するという義務は負いますが、アメリカを防衛する義務を負うことはありません。在日米軍への基地貸与とアメリカの日本防衛がちょうどバランスして、日米双方が納得していました。

ソ連という巨大な敵対国がいたから、アメリカも日本防衛の義務を負ったのです。高度に政治的に安定し、高度の産業技術、基礎技術を持つ日本にこれほどの基地を貸与してくれるのであれば、十分だと、当時のアメリカは考えたわけです。日本がなかったら、米ソ冷戦で勝てなかつた可能性もあるのです。

**横山** しかし、もうソ連はなくなりました。

**渡辺** 冷戦崩壊の1990年前後の時点で、日米同盟をどういうものにしていくか、国防をどうして担保するかを本格的に議論しなければならないはずでした。それなのに、平和が続いた時代にそんな議論は必要ないというものが平均的な感覚になってしまっていたのです。

核の議論はほとんどタブーでした。核のことを議論するだけで、外国に誤ったシグナルを送ることになるからと、ストップがかかったほどです。これをある政治家は非核四原則だと言いました。持たず、つくらず、持ち込ませず、語らせず。

**横山** そういう話になると、すぐ左翼だと言われてしまします。

**渡辺** 私は日本が核を保有すべきだと考えている者ではありません。しかし、これ以上、日本を理不尽な理屈で押してきたり、こういう工程表に従って核を開発して保有するというプログラムを持って、これを国際的にアピールしていく必要があると思います。



横山 それは重要なことだと思います。

渡辺 日本は広島、長崎で30万人の犠牲者を瞬時にして出した、世界で唯一の被爆国です。だから核廃絶だと騒ぎます。そうではなく、被爆国であるが故に、日本の国民をこれ以上の核の惨禍にみまわせるわけにはいかない、それがわが国の国是だというメッセージを発表すれば、国際社会の心を打つかもしれません。

国民の中には核廃絶のマジョリティと、保有すべきだという議論の双方があります。民主主義国ですからいろいろな意見があつて当然です。これらをそのままに、意見のスペクトルのままに対外的に発信することが抑止力になる、と私は思います。ジャーナリズムの本来の役割ですね。

横山 戦時中はマスコミが先頭切って戦争勝利を発表していました。

先生がおっしゃるように、次の世代には歴史観も必要になりますね。

渡辺 何かの戦略を考えるとき、アカデミズムが何かを発信できるかと言えば、それは無理な話だと私は思います。

やはり、現実に日本と日本人が歩んできた歴史の中に真実があるのです。なぜ日清戦争を戦わざる得なかつたか、なぜ日露戦争に踏み切らざるを得なかつたか、どのような戦略を取つてそれらに勝つたのか。あるいは第二次大戦で日本はどうして負けたのか。負けたのなら自省しなければなりません。しかし、自省ではなく自虐に陥っています

その自虐心理が東京裁判史觀と言われるものです。悪いのは日本だけだ。日本が悪さをしなければ日本の安全は必ず守られるという、幼稚園児並の議論をなぜか日本人は信じてしまいました。

四海は平和であり、日本に仕掛けてくる国はない。仕掛けるのは日本だけだ。武器を放棄する憲法9条を持っていれば安全でいられるという感覚。ほとんど漫画のような世界です。

横山 外交とは威嚇であるとよく言われます。八方美人的になつてしまうのが日本の外交の問題点だと思います。

渡辺 福沢諭吉や陸奥宗光の文章を読むと、「武力の後援なき外交は成り立たず」という表現がでてきます。

武力が後ろ盾になければ外交で勝利することはできないことを福沢も陸奥もほとんど同じような文章で述べています。恐らく当時の指導者は皆そう考えていたのでしょうね。

## なぜ日米が戦わざるを得なかつたか

横山 当時の海外はどんな動きでしたか。

渡辺 アヘン戦争が起つて香港がイギリスに割譲されました。当時の中国は、政治的凝集力をもつて軍事的近代化を進めていかないと、欧米列強にとても勝てないと、考えてみれば当然の認識を持つことがありますでした。

もっとひどかつたのは朝鮮半島。清国を後ろ楯に専制政治を固めて、武力ではなく知識人による政治、文治を進めてしまつたのです。日清戦争とは朝鮮を清国から自主独立させるための戦争でした。最終的には日本による韓国併合でした。なぜそんな手ひどいことをしたのかと言われるかもしれません、帝国主義の時代、弱者に安住の地はなかつたのです。弱肉強食、思想的な背景にはダーウィニズムがありました。

横山 明治時代の富国強兵、殖産興業によって日本は強くなっています。

渡辺 日本人は日清戦争に勝つて巨額な賠償金を奪い、それで戦艦を購入して世界上位の海軍国になり、同時に殖産興業によって経済力をつけていきます。そうしないと世界で勝ち抜いていけないからです。

日英同盟は、小村寿太郎のたいへんな努力によって、日露戦争の2年前に締結されました。ロシアの南下政策に対抗するには日英が手を結ばなければならないと両国は考えたわけです。日英同盟は当時の超大国イギリスが初めて他国と結んだ同盟関係です。

日英艦船の排水量の合計は、他のすべての国の艦船排水量の合計より多くなつて絶対的優位に立つことができる。日英両国は怜憫にそう判断したのです。

横山 日英2国が合計がその他の世界全体より多いのですか。それはすごいですね。

渡辺 見事な国際感覚です。世界第一級の国と手を結ぶことができたという国民の誇りともなり、日露戦争に向かう国民的な精神の昂揚ともつながっていったのです。

横山 日本の艦船と言えば、連合艦隊がロシアのバルチック艦隊を撃破しました。

渡辺 日英同盟はじつは明治の終わりから大正期の20年くらいしか保たなかつたのですが、この間は日本の黄金時代でした。中産階級が勃興し、学術や芸術が振興され、なによりも世界で初めての民主主義、大正デモクラシーが起きました。

その後、ヨーロッパを舞台にして起こった第一次世界大戦により、敗戦国ドイツはもとより戦勝国イギリスも廃墟同然の状況となりました。戦局外のアメリカと日本がますます興隆していきます。荒廃したヨーロッパに戦略的物資を売りつけることによって興隆したのが日米でした。

横山 なるほど。それで生き残った日米が戦うことになるわけですね。

渡辺 第一次大戦後の霸権国家は日米の2国となつたわけです。霸権国とは他国の霸権を認めない存在です。両雄並び立たず。全力でぶつかってきたアメリカに日本が敗北したわけです。日英同盟が廃棄されなければ、第二次大戦での敗北という日本の悲惨な歴史はなかつたかもしれません。

横山 そして、現在の日米関係に繋がります。

渡辺 日本の安全保障を守るには日米同盟、世界でいちばん強い霸権国家と手を結ぶことです。幼稚園児でもわかる話です。

しかし、普天間飛行場移設問題で、鳩山さんは1年間も無駄に過ごして、沖縄の世論も別のほうを向かわせてしまいました。沖縄世論の愚弄です。

日米同盟をこれだけ貶めている鳩山政権に、いったい何の哲学があったのか私には全くわかりません。政権を取った時点では政治的凝集力が民主党を利していましたから、そこで10年前の日米合意を実現すべきでした。沖縄県知事も名護市長も「志ならずだけれど

も受け入れる」と言っていたのですよね。

横山 それをまた振り出しに戻してしまった。

渡辺 「自分たちのところに基地の80%がある、いくらなんでも不平等だ、日本の安全は私たちだけで守るのか」、そう言う沖縄住民の気持ちはよくわかります。鳩山さんが県外、国外もあり得ると言えば、これを住民が絶対的に支持するに決まっています。

日英同盟を結んだのは日本の勝利ですが、これが潰えたのはアメリカの容喙によってです。ある程度仕方がなかったところもあります。しかし、現在の日米同盟は、核の傘に守られている当事国の日本自らノーと言っています。そんな話はありません。世界最強の霸権国家と手を結んだときに日本の安全がいちばん守られるのですから。

## 国民に恐れられる 民主党政権の政策

横山 鳩山さんは「友愛」で中国と仲良くしましょうと言っていましたが、いろいろと問題が起きて「友愛」などと言っていられなくなりました。

渡辺 日本はあの程度でも政治家として留まっていられるという安逸な国です。

横山 もう一つ、永住外国人地方参政権の問題があります。ほとんどの国民は反対していると思いますが、その前兆として、北海道や対馬などの土地が外国資本に買われています。永住外国人地方参政権が成立したら、外国人の村長などが出てくるかもしれません。

渡辺 当然、出てきます。民主主義国の日本ではどこに住もうが、戸籍をどこに変えようが自由で、ポータビリティと言いますが、これを制約する法律はありません。

もう一つ、民主党はマニフェストの中で「地域主権」と言っていますが、これもおかしい。地方分散とか地方分権ならわかりますが、主権を地域に渡すというわけにはいかない。

横山 徳川時代のように、各地に城主ができるかもしれません。

渡辺 神奈川県では県内で教科書をつくり始めていますが、そんなこともあちこちで起こるでしょう。そして、例えば自衛隊の装備一つでも道路輸送ができなくなります。ある地方の首長が通ったら困ると言えば、もう動けないわけです。現在の法律でもかなり怪しいのに、地域主権ということになると、もうどうしようもありません。

例えば、親父がしっかりして家族に信頼されている家庭では、子供たちは安んじて自由に行動できます。しかし、親父が頼りない家庭では、子供の自由度が少ないのでないでしょうか。子供は心配で自由に活躍できません。

横山 おっしゃる通りです。

渡辺 それと同じで、国家主権がきちんとしていれば、地方の自由度は逆に強まる可能性があります。

アメリカは国が非常にしっかりしています。それが故に、各州で法律や教育制度などがばらばらでも、文字通りしっかりとした United States of America です。やはり中央政府が強く、大統領のパワーが強いから地方が自由にできる。ドイツもオランダもそうではないかと思います。中央が弱くて地方が強くなったら本当にばらけてしまします。

インドも中央政府が強い。そのためにでしょう、州によっては共産党政権まであります。それさえも許容できるのは、中央政府が国家を守る力を持っているからです。

それに比べ、国家がこんなに弱くなってしまった日本で、地方主権とはどういうことでしょうか。

横山 日本がばらばらになるのは目に見えています。渡辺 もう一つ恐れられているのは、民主党が言っている人権擁護設置法案でしょう。反中央、反日集団に地方政府が反対できなくなる、さらに彼らを権力の内部に抱え込んでしまう危険性を持っています。

それから東アジア共同体。国をばらばらにして東アジアに溶け込ませてしまうということらしい。EUのようなものが今の東アジアができると思っている。しかし、尖閣諸島での中国による侵犯事例を見てもわかるとおり、東アジアはナショナリズムの真っ最中です。

軍事的な覇権を握ろうと必死になっている国と同じ屋根の下に住めるのでしょうか。理想主義というより、現実に立脚しない迷走、妄想でしかありません。

## 中国外交への失望が侮蔑に変わる!?

横山 先生は経済がご専門ですが、東南アジアは日本の経済の成り行きに非常に重要な地域ですね。

渡辺 アジアとは中国と朝鮮半島を指し、それ以外は東南アジア・南アジアを指します。私は両者を合わせてアジアとして言ってはいけないと考えています。中国・朝鮮半島とそれ以外のアジアは本質的に違うのです。

日本と相性が良いのは大陸アジアではなく海洋アジアです。

東南アジアには 90 年代に入ってから大量の日本企業が進出し、各国の経済発展の核になってきました。さらに、日本企業は個別に出ていっただけでなく、大企業であればいくつかのネットワーク型で進出しているています。マレーシアでもインドネシアでもフィリピンでも中国でも工場をつくるというネットワーク型の進出をしてきたために、日本はアジアの地域全体としての発展に大きく貢献してきました。

横山 この頃はだんだん日本の存在感がなくなってきたね。

渡辺 中国が巨大な国になってきて、中国がなければアジアの経済が動かないような構図になっています。マーケットとしては非常に魅力的で、企業が進出したいと思う国に変わりました。そして日本の存在が小さいものになってきたことを、東南アジアの国々はよく見ています。さらに、この度の中国の攻勢に対して外交敗北を喫し、東南アジアに大きな失望と不信感を与えていました。

この失望と不信が日本人の侮蔑に変わることを私は恐れています。

横山 どの国も日本の対応を見ていました。

渡辺 例えば、国民の能力や勤労意欲・学習意欲などから考えて、中国の次に大きく経済発展するはずのベトナム。尖閣問題で日本の体たらくを見て失望しているわけですが、これが侮蔑に変わりかねません。中国に南シナ海を抑えられたら、ベトナムは外洋に出ていく海がなくなってしまうのです。ベトナムだけでなく周辺の国々にとっても同じです。

横山 マレーシアの東海岸もそうですね。

渡辺 カンボジア、ラオス、ブルネイなどもそうですね。

これから本格的な外交的影響力の拡大競争時代に入り、この時期こそしっかりとほしと思っていた矢先に、民主党政権が登場してしまいました。我々が選んだのですから仕方ないのですが、明治の政治家たちが墓の下から「何をしているのか」と唸っている声が聞こえます。

横山 中国との関係が、今はぎくしゃくしていますが、日本は戦略的に今後どう対応すればいいでしょうか。

渡辺 日米同盟堅持が決定的に重要です。その上に立った「南北連携軸」です。

横山 「南北連携軸」とは。

渡辺 日本、台湾、東南アジア、インド、オーストラリアとニュージーランドという「南北連携軸」をつくって大陸を牽制するという外交です。

日本の安全保障を脅かすのは誰かと言えば、朝鮮半島。朝鮮半島に影響力を持っている中国、ロシア。ユーラシア大陸からせり出している等圧線にどう抗するかというのが、日本の百数十年の課題です。このことは現代にこそいっそうよく当てはまる、と私は見ていました。

日清戦争は独自で戦い、日露戦争は日英同盟によって、それぞれ清国とロシアの南下を食い止めました。その後の朝鮮戦争でも、中国人民解放軍と北朝鮮が手を組んで釜山まで侵攻し、もう少しで半島が赤化した可能性がありました。

横山 たしかにそうでした。

渡辺 尖閣諸島、竹島、北方四島の問題が日本を今後

とも徹底的に悩ませます。アジアを舞台にした国際政治力学の「先祖返り」で、100年前と同じ構図が表れつつあります。

日本だけでその流れに抗しきれるものではありません。日米同盟と「南北連携軸」で対中牽制していくというシナリオが必要です。

## 中国の恫喝を 日本人の目覚まし時計に

横山 民間レベルの経済交流は活発です。

渡辺 経済はウイン・ウイン。こちらが儲かって向こうも儲かるから取引が成り立ち、儲からなくなったら終わり、というだけの話。経済は大いに交流すればいい。

中国がなければ成り立たないような経済になってしまっているから外交的にもコミットしよう、というのではなく、民主党は、経済的にもお世話をしているから、経済界の社長さんを中国大使にしたらしいのですが、経済はもう一度いえばウイン・ウイン。日本と取引をしない中国経済はあり得ないし、日本企業が進出しない中国経済の発展は考えられないのです。

やはり、中国がこう来たらこうする、ああ来たらこうするという戦略を経済界もしっかり練つておくことが必要です。

横山 政治と経済を絡ませてきた場合、うまく切り抜ける知恵は日本の政府にありますか。

渡辺 残念ながらないでしょう。六十数年、何もしないで儲けさせてもらってきたために生まれたモラルハザードですから。

横山 中国船の事件はどうご覧になりますか。

渡辺 あのくらいの領海侵犯なら、日本は船も船員も返してくれる、少し脅かせば船長も返してくれる。最大の問題は中国にそう学習させてしまったことです。100メートルの侵犯が、次はもう100メートル、次はもう100メートルと尖閣諸島にぐいぐい迫っていく

るに違いありません。

私は中国がけしからんとは思っていません。愛国主義的な指導者が権益を拡大しようとするのは当たり前のこと。勃興期の中国がいよいよ帝国主義的な行動に出てきたわけで、いくら腹を立てても別の国のことです。日本が日本人をどう考えるかがポイントです。

横山 教育の問題にも係ってきますね。

渡辺 おっしゃる通りです。

横山 中国船の事件が起こって、日本にとっては良かったのかもしれません。

渡辺 警告信号を発したという意味ではそうかもしれません。

しかし、まだ菅政権の支持率は自民党よりずっと高いですよね。金正日の日本恫喝、中国の日本恫喝が、目覚まし時計効果となって日本人を覚醒させねばなりません。

アマコストの「中国は脅威か」という論文をたいへん面白く読みました。かつてスプートニクショックが起こりましたが、あの時代にアメリカは政治改革、教育改革など次々に改革を進めていきました。これが目覚まし時計となり、結局はロシアの崩壊をもたらしました。

中国はやはり脅威ですが、自国が強くなるための目覚まし時計効果を持たなければいくら脅威と騒いでも仕方がない。

金正日による恫喝、尖閣諸島で中国による恫喝を真に日本の役に立てるには、教育も含めて、日本と日本人の目覚まし時計に使わなければいけません。

ASEMで菅さんは一体何をしたのか。外交的なセンスがまったくありません。今こそ反撃すれば、反中のな気分が盛り上がって世論も味方するでしょう。その決意がまるでないのです。

横山 本格的に戦略を立てるセクションがないからでしょうか。

渡辺 安全保障会議の設置が必要です。現政権はこれがいちばん必要なときに政治主導、官僚排除と言いますが、要するに素人が外交をしているわけです。ASEMでも温家宝さんと廊下で20分ほど話したとか、通訳をつけていなかったとか、見ていられません。外務省

の関係者ならあんなことにはならなかつたでしょう。

それに、廊下で呼び止めるなどということをしてはいけない。逆に向こうから声をかけてもらわなければ。

## 次の世代は 怒りの感情でスイングする!?

横山 戦後65年、日本はずっと「うやむやの国家」でありつづけました。

渡辺 鳩山さんが首相を辞めてから二度ロシアに行っています。

ロシアの政治家は、鳩山さんを大した才能がある政治家とは思えないが、宰相を務めた男がリタイアして二度も来てくれるのだから、何かお土産があるのだろうと期待したが、戦略らしきものは何もない。来てもらっても議論の仕様がないといった感じらしいのです。

横山 相手国の人にはやりにくいででしょうね。

渡辺 不気味でしょう。

横山 鉄のカーテンならぬ「うやむやのカーテン」は、ある意味で日本の政治家の強みかもしれません。日本がナショナリズムだとおかしくなるでしょうから。

渡辺 日本人がいちばん恐れなければならないのはやはり日本人です。

私の世代の者は中国を侵略したこと、韓国併合も知っていますから、両国から無理難題をふっかけられても仕方がないかなという気持ちはあります。しかし、アメリカと戦争をしたこともよく知らない、次の世代の平均的な若者たちは、尖閣諸島でやっつけられ、竹島でやっつけられ、北方四島にまでメドベージェフ大統領が来かねないというような、冷遇や屈辱をなぜ許すのか、と感じています。

そのうちに彼らが怒りの声を大きくあげる可能性があります。日本が排外主義にスイングし、軍事大国、核保有にまで一直線に進んでしまうかもしれません。

ここを日本人は恐れなければならない。

結果的に政府はそういう日本人をつくっているわけです。

横山 その流れが濃くなってきたような気がします。核にしても極端にシフトしてしまうかもしれません。

渡辺 その危険性がありますよね。

横山 恐いですね。

国会の与野党の論戦を見ると、民主党は与党慣れしていないし、自民党は野党慣れしていません。

渡辺 仙谷さんが「過去に悪いことをしたから、尖閣も仕方がない」とぼろっと本音を漏らして、新聞の一面に載ってしまいました。その辺りが彼の心情なのでしょうね。

横山 しかし、あの一言はまずいですね。絶対に言つてはいけない。

渡辺 とんでもないことです。野党気分で真情をぼろつと言つてしまつたのでしょうか。

横山 最後に食料問題、エネルギー問題についてお伺いします。

渡辺 日本だけではなく、中国自身にとって恐ろしいテーマですよね。あの巨大な国が走り回っているわけですから、エネルギー・も、食料・も次々と不足して、世界中の利権を漁りまくると思います。

横山 中国はアフリカの資源をほとんど抑えました。

渡辺 日本にはできないことです。それより心配なのは、東シナ海、南シナ海が中国の制海権に入ってしまうことです。日本は干上がってしまいます。その問題をどう解決するのか、容易に答えが見つかる問題ではありません。

日本では、環境制約が十分に認識されていて、経済人の力によって省エネルギーは我々の想像より進みつつあります。厳しすぎる制約の中でも日本はやっていけるでしょう。

横山 一つ、明るいお話を伺いたいと存じます。

渡辺 山梨大学では全国から多くの秀才を集めて燃料電池の開発をしています。まだ商品化には至りません

が、技術的にはかなりハイレベルものができます。まだ石油やガスと競争はできませんが、現場で見ているとすごいなと驚きます。あのような技術で道を探るのはいかにも日本らしいやり方です。

横山 先頃はノーベル賞受賞の快挙がありました。蓮舫さんも日本の知的財産、レベルの高い日本の基礎科学をぜひ見直すべきです。民主党政権も科学技術にもっと目を向けてほしいと思います。

渡辺 新成長戦略は自民党時代の政策の焼き直しです。科学技術立国をめざし、技術者が大きな夢を持てるような戦略を練らねばなりません。

湯川秀樹さんがノーベル賞をもらった少年時代を思い出します。国民がうちひしがれているときの、大きなニュースでしたよね。

横山 やはり子供たちが誇りを持てる国にしたいですね。日本はそれほど悲観する必要もないと思います。私どもの世代は、石油を抑えられても、木炭自動車をつくりました。煙をもくもく吐きながらでしたが、動かないはずの自動車を見事に走らせたのです。このあたりも日本人の強さではないでしょうか。

渡辺先生には、またいろいろと日本安全保障・危機管理学会でご指導いただきたいと思います。本日はありがとうございました。

(収録日：10月7日 聞き手：横山佳夫)

#### 聞き手：横山佳夫

財団法人 アジア刑政財団 理事

地球環境平和財団 監事

学術社団 日本安全保障・危機管理学会 顧問



#### ■対談後記

渡辺先生は、私もメンバーである防衛省OBを主体とする、学術社団「日本安全保障・危機管理学会」の会長を務められ、日頃からご指導をいただいております（副会長は井上幸彦 元警視総監）。先生は本年8月4日付の雑誌『正論』で「国益というものがある以上、戦争は絶えることがない……戦争には必ず勝者と敗者がある。敗者に必要なことは敗北への自省であって自虐はない。」と述べられています。また、常に歴史感の検証に基づき左右の極論にあらず、ナショナリズムに至ることを戒め冷静であれとも。且つ、時には強者に対し強者の対応（戦争否定）が政権当事者の外交上、政治力で必要な場合もある、とも述べられています。今後の渡辺先生の更なるご活躍を期待しております。